

理事長挨拶

皆様方に於かれましては、新型コロナ禍にあって不自由な暮らしを強いられておられることと存じます。私達の施設や入所者の方々、更に職員にあっては、感染防止に向けて精一杯の努力に努めておりますものの、家族や周辺との環境から感染者が身近に聞こえ始めてまいりました。この様な状況が早く収束することを切に願うところです。

この様な状況下において、特別養護老人ホーム桜木園の新築移転から二年を経過しようとしています。御陰様で不馴れな戸惑いから、また建物等の不具合の状況からようやくリズムのある日常に移行してまいりました。新型コロナ禍にあって、面会もままならない状況が続ける中でも今日に至りましたのは、施設長はじめ職員の絶え間ない努力と、関係者・関係機関の御力添えの賜物と存じております。

ここに至りまして、桜木会設立以来長年に亘って特別養護老人ホームとして使われてきました従来の桜木園を取り壊すことになりました。老朽化に耐えられず、致し方のないことではありますが、一抹の寂しさは禁じ得ないところです。建物の取壊し後の土地の利用につきましては、幾つかの条件のもとに公募による売却を目指してまいりました。設立当時取得いたしましたものの他に、駐車場として大湊病院（今日むつりハビリテーション病院）から借用しておりました土地を数年前に一部事務組合医療センターから購入しております。これらの土地を自前で活用する術を社会福祉法人という枠の中で見付けるのは、その立地からも難しいと判断いたしました。創設の地ではありますものの、これからの桜木会の運営を考えますとき処分を決断した次第です。

唯、前述した公募に当たり、幾つかの条件を付しましたのは、その立地にあります。海上自衛隊総監部を見下ろす釜臥山への登山道の入口に当たります。（この登山道は現在自衛隊のみの利用。）その為に、売却に当っては、購入希望者は日本国籍を有する者に限り、しかも転売を目的としたり問題の生じる様な方への売却を行わないことに決めておりました。戦後海軍の管理地を所管換の手續や買収等を行わずに大蔵省名義として一般に売却する手法は、今日も尚続けられています。我国の安全保障の面からも極めて憂慮すべきものであり、国の主要な機関がこの様な土地に対して無節操なことを続けていることに対して、強い憤りを感じてきました。このことを多くの人々に語り、海上自衛隊近くで財務事務所の国有地処分があると聞くと、その入札に参加し、外国勢力に取得されない

よう方々に依頼してまいりました。その結果、幾つかの箇所は外国人の手に渡ることなく、地元の方々の所有地になりました。

世界中が不安定になり、ロシアや中国、北朝鮮のみならず、韓国の動向次第では御題目の平和だけでは済まない状況が我国にも目の前に迫ってまいりました。こうした中であって、前述しました様な条件だけで処分しても良いものか思案しております最中に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。危惧しておりましたものが現実になった訳です。

今でも愚かな空想的平和主義者は、ウクライナが投降しロシアの言うことを聞けば死なずに済むという様なことを愚かにも公共放送を使って語っています。占領され、属国になるということは、個々の人々にとっても、死ぬことよりも、もっと惨めな状況に置かれることは、古来の歴史が示しています。人間とは、ときに美しくもあり、同時に汚らしいものでもあります。口にするのも穢らわしいことを数限りなく行ってきたことは、戦後の我国の占領下を振り返っても判ることではないでしょうか。

我国を決してその様な状況に陥らせない為にも、国防・安全保障の充実は欠くことが出来ません。憲法教の人々は、御題目で平和が来る様に語ります。それがいかに空疎なものであるかは、今回のロシアのウクライナ侵攻を見れば明らかです。何時の時代も気違いはいるのです。ロシアだけでなく中国や北朝鮮、韓国だとして油断はなりません。常に用心を心掛けなければならないのです。

そのことから、今一度、旧桜木園の土地の処分のあり方を見直してみることに致しました。

桜木会の理事長として、言行一致の行動のために、この土地をどの様に扱い、ひいては我国の防衛のための小さな一助となり得るための方途を考え組み立ててみたいと思います。

つきましては、建物取壊し後、しばらくは桜木会の保有の儘としつつ、遠くない時期にこの土地の活かし方を、目標をもって定め、公表させていただく所存です。

皆様方に於かれましては、此段御理解賜り、今後共変わらぬ御力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和4年3月7日

社会福祉法人 桜木会
理事長 濱 崎 正 明

各 位